

マックス・E・アマンの 世界馬術界展望

マックス・E・アマン氏は政治ジャーナリストから馬術界に転身し、障害飛越のワールドカップを創始しオーガナイズするなど馬術界に多大な貢献をしてきた人物だ。そのアマン氏が、世界の馬術界の過去から現在までの話題を縦横に語る。

英国、ドレッサー・ジュ界の 新たなNo.1

F EIは1964年から毎年、ドレッサー・ジュのチャンピオンシップを開催している。この48年間に12のオリンピックと同数の世界選手権、24のヨーロッパ選手権が行われ、ドイツは42の金メダルをチームとして獲得してきた。とくに73年から2006年の間、ドイツは向かうところ敵なしを誇っていた。残る6つのメダルは70年から72年に活躍したペベル、イクホルル、タリフというまさに馬術のドリームチームともいべき馬を所有していたソ連にもたらされた。この無敵ドイツを打ち破ったのはオランダで2007年のことだった。引き続き09年、10年とオランダの年が続く。そして今年、8月17日から21日にロッテルダムで行われたヨーロッパ選手権を制したのは英国だった。

英国ドレッサー・ジュの 着実な進化

1948年、前回ロンドンで開催されたオリンピックで英国はドレッサー・ジュ競技にひとりの選手も出していない。英国軍隊は20世紀初頭からジャンピングにおいて多くのトップライダーを輩出しており、総合馬術でも傑出した選手を生み出した。しかし、ドレッサー・ジュの優秀な選手はひとりも出していないのだ。56年、英国からドレッサー・ジュの選手が初めてオリンピックに出場した。この56年のオリンピックではふたりの年配の女性、リアン・ブレнда・ウィリアムズとロルナ・ジョンストンが出場したが、スウェーデン、



ロッテルダム大会でのローラ・ベクトルシェイマーと新星カール・ヘスター(左ページ上)、シャルロテ・ドゥジャルダン(左ページ下)。ロンドンオリンピックではこの3人から目が離せない。
©Peter Nixon/FEI

ドイツ、スイス、さらにソ連といった国が優勢で、はるかに及ばなかった。その後も数十年間にわたりにイギリスでは女性ライダーが相次いだ。それはジョアンナ・ホル、ドミニ・ローレンス(後にモーガン姓に)、ジョニー・ロリス、テン・クラーク、ダイアナ・マソン、サラ・ウィットモアといったライダーだ。

84年、英国から初めて男性ライダーがオリンピックのドレッサー・ジュに出場した。このクリストファー・バートルはウィリー・トウトに乗り個人で6位に入賞。この順位は英国ドレッサー・ジュ界において過去最高の成績だった。現在、バートルはドイツの総合馬術のコーチを務めている。84年当時、25年後の競技会で、英国チームが世界一に輝くと誰が予想できただろう。

92年のバルセロナオリンピックで英国ドレッサー・ジュにも希望の光が射しこんだ。それまで40年間におよび、引退した年配者が英国

ドレッサー・ジュ界を席巻していたが、ついにこの大会に若手のライダーが出場したのだ。それはカール・ヘスター(25歳)であり、エミール・ファウリエ(29歳)であり、ローラ・フライ(25歳)だった。バルセロナオリンピックではチームとして7位、ヘスターは個人としてグランプリスペシャルに出場し、個人の最終戦まで残った。

人で行われたフリースタイルで6位に入賞したのだ。残念なことに、このヒンデルの素晴らしい成果にほかの英国選手は応えることができなかったため、チームとしては5位に甘んじた。このメンバーにはミストラル・ホヨリスに乗った23歳のローラ・ベクトルシェイマーがおり、17位だった。

そして09年、ウインザーのヨーロッパ選手権でかつて無敵だったドイツが07年に続きオランダに打ち負かされる。そしてオランダに次いで2位はドイツに2パーセント勝った英国に与えられた。エマ・ヒンデルとランセット号は安定した競技内容で8位に。そこに現れたニュースターこそローラ・ベクトルシェイマーとミストラル・ホヨリス号だった。この人馬はグランプリとグランプリスペシャルで3位、フリースタイルで4位となる。英国チームはお馴染みのエマと新星ローラに加え英国チームはリエプリングに騎乗したカール・ヘスターとトウソックスに乗ったマリア・エイルベルグがメンバーだった。

翌年、若き英国ライダーたちはさらなる飛躍を遂げる。スロベニアのリピカで行われたヨーロッパ選手権で英国チームは銀メダル、個人でエミール・ファウリエが銅メダルを獲得したのだ。しかし、翌年の英国チームは谷間でもがいている状態に追い込まれた。トップホースを持ちながら、乗りこなすしきれなかったのだ。翌2003年には状況が上向き、チームで銅メダルを獲得した。そのメンバーはエミール・ファウリエ、リチャード・ダヴィソン、そして新たな希望の星がエマ・ヒンデルだった。04年に29歳のエマ・ヒンデルはオランダのインケ・バルテルスが乗っていたランセットを購入した。08年、北京オリンピックの馬術競技の会場、香港でこの新たなペアはグランプリで4位、グランプリスペシャルで8位、そして7

この時点でも世界のドレッサー・ジュ界はイギリスが獲得したメダルを黙殺していた。この時、注目の的はオランダの新たなスター、エドワード・ガルとトティラス、アデリンデ・コーネリセンとバール・コンビ、そして2回連続オリンピックの金メダリスト、アンキー・ヴァン・グルンズヴェンとサリネロがいるチームが09年の金メダルを獲得したこと。このときドイツを20パーセント近く引き



©Peter Nixon/FEI

離していた。

10年のアメリカ・レキシントンで行われた世界選手権大会で注目を集めたのは、やはりエドワード・ガルとトティラスだった。実際このコンビはすべての金メダルを獲得した。チームの金メダルに貢献し、グランプリスペシャル、フリースタイルと進んだのだ。ただし、前回のような圧倒的な勝利ではなく2位以下との差が縮まっていた。アンキー・ヴァン・グルンズヴェンとサリネロがいないオランダはイギリスから5パーセント、ドイツから9パーセント優勢だったにすぎない。

英国チームは堅実なエマ・ヒンデルとランセットのペアが引退したため、マリア・エイルベルグとカール・ヘスターで構成された。ヘスターはいまだに問題を抱えるリエプリングと共に出場した。彼らはローラ・ベクトルシエイマーとミストラル・ホヨリスの陰に隠れていた。ローラはチームとしても、個人のグランプリスペシャルもフリースタイルも銀メダルを獲得したのだから。それでもドレッ

サージュ界は英国に注目することはなかった。つまりミストラル・ホヨリスはもう15歳で先がないと判断したのだ。

密やかなるスター誕生

今年に入り二つの大きな変化があった。ひとつは馬術界の大ニュースとして、もうひとつはひっそりと扱われた。ひとつ目は11歳のトティラスがオランダ人オーナーからドイツ人オーナーに売却されたというニュースだ。パウル・シヨッケメーレとアン・カスリン・リンゼンホフというかつての優秀なオリピック選手が1000万ユーロをこの牡馬に払ったという。トティラスのライダーとして選ばれたのはリンゼンホフの娘婿、マティアス・アレクサンダー・ラーズ。ラーズは昨年の世界選手権でスターンテイラーに乗ってグランプリスペシャルで13位だった。この出来事は馬術界のみならずドイツ中の一般紙のトップを飾った。今年のCHIOアーヘン大会でラーズとトティラスは健闘し、グランプリの3種目すべてに優勝した。しかし、この8月のロ

ッテルダムの世界選手権で、トティラスの基本の歩様に問題があることが明らかになった。そのうえ、踏歩変換でミスし、トティラスの代名詞ともいえるピアフフェで失敗してしまった。最終的にトティラスは3つの競技に3位、4位、5位という結果に終わった。

もうひとつの出来事は英国に関する静かな変化だ。ロッテルダムでふたりの新たなスターが生まれ

た。ローラ・ベクトルシエイマーと老齢の域に入ったミストラル・ホヨリスは望み通りグランプリスペシャルで銅、フリースタイルで4位に入った。つまり英国チームの金メダルに大きく貢献したのはローラではなく別の2人馬だった。この2人馬はロッテルダム以前からその才能が評価されながら他のスター人馬の陰に隠れていた。それは10歳のオランダ産牡馬、ユートピアに騎乗したカール・ヘスター、ヘスターのアシスタントだったシャルロット・ドウジャールと彼女が乗った7歳の同じくオランダ産せん馬、ヴァレグロだ。

20年前に世界の馬術界に登場したカール・ヘスターはこの2頭の馬をトップまで育て上げた。彼はユートピアを4歳の時、ヴァレグロを2歳半の時にオランダで購入した。ヘスターが世界デビューした際、ローラ・ベクトルシエイマーの父の馬に騎乗した。ローラの父もローラのようにメダル獲得とまではいかなかったが才能のあるドレッサージュライダーだった。

ロッテルダム大会で英国はドイツに12パーセント上回り、トティラスのいないオランダはドイツに4パーセント下回った。カール・ヘスターとユートピアはグランプリで優勝後、グランプリスペシャルとフリースタイルで銀メダルを獲得した。26歳のシャルロット・ドウジャールは今年グランプリライダーとしてデビューし、ヴァレグロと健闘している。この馬はユートピアよりさらに能力が高いというのが大方の見方だ。



©Peter Nixon/FEI

ヘスターとユートピア、ドウジャールとヴァレグロ、ベクトルシエイマーとミストラルという3組は来年のロンドンオリンピックでもっとも優勝に近いと予想される。トティラスとサリネロのいないオランダはアデリンデ・コーネリセンとパージバルの力に頼るしかない。08年に頭角を現し、昨年のワールドカップで優勝し、今年に入って2度のヨーロッパ選手権を制したコーネリセンとパージバルはほかのオランダ人馬からのサポートは期待薄だ。ハンス・ペーター・ミンデルフートの馬、ナディーンは引退し、アンキー・ヴァン・グルンズヴェンとインケ・バルテルスはトップホースを所有しておらず、エドワード・ガルの新たなパートナー、トティラスと同じ父を持つシスター・デ・ジュはいくつかの欠点がある。

ドイツも似たような問題を抱えている。ラーズとトティラスの今後は予測がつかない。エル・サントに騎乗したイザベル・ワースは

ロッテルダムでピアフフェに問題があることが判明、ダモンヒルに騎乗したヘレン・ランゲハネンバークはチームの固定メンバーだが、イザベル・ワースとエル・サントのようにメダルを狙える位置にはいない。

英国に続くメダル候補はドイツ、オランダ、スウェーデン、アメリカなどで、そのあとにスペインとデンマークが控えている。

オランダの馬産協会、KWPNが最近のヨーロッパ選手権のトップ5の馬を輩出しているのは興味深い。ユートピア、パージバル、トティラス、ヴァレグロ、そしてスキヤンデイクだ。スキヤンデイクはスウェーデンのパトリック・キツテルが騎乗しフリースタイルで銅メダルを獲得した。ロッテルダムにおけるドイツ産のトップの馬はイザベル・ワースのエル・サントだが、7位に終わった。*

冒頭の競技結果には1980年にイギリスのグッドウッドで行われたオリピックの代替競技会が含まれ、ドレッサージュのメジャー国がすべて出場をボイコットしたモスクワオリンピックは除外している。

マックス・B・アマン

1938年、スイス生まれ。1964年に渡米しニューヨークの国連本部詰め外国人特派員として主に政治関係のジャーナリストとして活躍。69年に『スイス・アメリカン・レビュー』紙の編集長に就任。73年にスイスに帰国し、『ルツェルン新聞』に編集長として迎えられる。そのかわり、馬術競技観戦が趣味だったことから馬術関連の記事も手掛け、翌74年に国際馬術ジャーナリスト連盟(AEJ)の会長に就任。78年新聞社を退社、以降、馬術のさまざまな大会でディレクターを務めるなど、多大な貢献をしてきた。